

2009年10月4日

空に満月が浮いていた。
街の光があふれる日本でも、
月は相変わらず明るい。

そういえばちょうど1ヶ月前、

2009年9月5日、

私たちは、モンゴルの夜空に満月を見た。
同じ月かと思うくらい、大きな月が浮かんでいた。
草原には明かり一つ見えない。
にもかかわらず、
月の光で、
ずっと遠くまで明るかった。
夜は怖いものではないのだと、
この満月を見て、そう思った。

2年前、

私はモンゴルで月食を見た。
地平線の際だけ、夕焼けのような赤い線が見える。
小説でしか知らないような赤い月が、少しずつ欠ける…。
あの時は確か、初めてのモンゴルだった。
初めて孤児院に行って、涙があふれるような出会いをした3日間。
その、ほんの一瞬。

そして、またモンゴルに来た。

モンゴルに来ると、日本にはない色々なことが起こる。
ゲストハウスを追い出された。
かと思うと、
つい先日会ったばかりの人が、家に泊めてくれた。
一度、モンゴルの人の手で壊されそうになった公園は、別のモンゴルの人が守り通した。
そして…
去年完成した公園は、あっさり壊されていた。

2年越しにあった子ども達は、私のことを覚えていてくれた…
去年会った人は、突然の連絡に、いやな顔せずこたえてくれた…



特定非営利活動法人 GNC Japan
<http://www.kyouzon-gnc.com>

今年初めて会った人は、来年、家に泊まってもいいと言ってくれた…

モンゴルに来ると、人との出会いがうれしくなる。

経済は日本より厳しくて、日本では考えられないような生活が当たり前が存在する。

今日食べるものがない子ども達

おしゃれなバーに来る大学生

果てしなく広がる緑の草原と青い空

…舞う、ビニール袋

よいことも悪いことも、

ここではすべてあからさまだ…

そんなことをひとつひとつ…

誰かが見つけてくれるだろうから。

A

昨年、GNC が作った公園が壊され、土地が取られそうになるというショックな事件が起こった。
その後、GNC モンゴルとエコロジー教育センターとの協力で、何とか土地を死守することができた。

エコロジー教育センター 2009 年



だが、井戸は壊され、土地の多くは取られてしまった。井戸がないため、別の場所からホースを伸ばす。
ホースが届かないところには、バケツで水遣りをするしかない。
以前はスプリンクラーもあった。
橋は水のない川を渡し、池はコンクリートでできた大きな穴に成り果てていた。

水遣りをする子ども達 エコ教室



本当に復活するまでは、道のりは遠そうだ。
だが、エコロジー教育センターの職員が加わったことで、また何かが変わるかもしれない。

1989 年の民主化運動からはや 20 年。今では多くの外資企業が入り、どんどん新しい建物を建てていく。
私有地の概念を持って、囲いのない土地をどんどん取得していく。
ある場所では「公園」があるにもかかわらず、まるで「空き地」のような扱いを受ける。
そうかと思うと、選挙の為に突如として公園が増える。
突然取られてしまう可能性のある自分達の土地を死守するため、モンゴル国の人たちは様々な努力をしな

ければならなくなった。

音楽舞踊学校では、昨年、GNC の支援で井戸が掘られた。
何年か後には、本当にきれいな公園になるはずであった…
だが今年、学校の中に作った公園はなくなってしまっていた。

2007 年音楽舞踊学校



2009 年音楽舞踊学校



大きな穴が掘られ、植えられていた木々は根こそぎ取り除かれていた。
かろうじて、今年植えた苗木が校舎の壁際に移されていた。
ただ、公園だったところを懐かしそうに眺める。

音楽舞踊学校の公園も、どこかに取られそうになっていたらしい。
音楽舞踊学校の校舎は古い。それもあって、公園のあった場所に新しく校舎を建てることで、なんとか土地を取られる心配がなくなったようだ。
…いろんな思惑が絡まざるを得ない。

公園がビルになることは、今のモンゴルでは日常茶飯事のようなのだ。
「公園」はそこの「草原」ではないのだが…
建物のないところは所有者のいないところとでも判断しているのだろうか？

ウランバートル市内では、土地が企業に取られ、突如として近代的な高層ビルが建てられたりする。一方、社会主義時代から建設中の建物は、所有者のなくなった土地で、壊されることもなく、鉄筋がむき出しの「建設中」の状態に残っている。

草原に行っても私有地の概念がモンゴルにも浸透してきていることに気づく。本来なら、土地のすべてが皆のもので、「私」の土地を囲う週間はなかったのだが…

今では草原のいたるところで木の囲いが見られる。

ウランバートルから少し離れた、別荘群では、山一つを囲おうとするかのように、レンガの柵で覆っているところもあった。

別荘群



モンゴルといえばイメージするのは、

あの青い空と、見渡す限りどこまでも続く草原。

数年後、日本みたいに道の脇に塀が並ぶ、そんな風景がよくある光景になるのだろうか？

せめて、笑い話で終わらせたいものだ。

A

2009年9月17日付けの『モンゴル通信』(No.35 第219号)に、以下の記事が載っていた。

砂漠化—森林の火災が影響

世界銀行の調査によると、森林資源の半分はこの30年間に消失したという。モンゴルでは害虫、乾燥化、不法伐採、木の実の不法採集によって森林が破壊され続けている。過去10年間、59万ヘクタールが森林火災で焼失し15億トウグルグの被害が出ている。…中略…森林火災は年間平均160回も発生し、そのうち99%は人為的な原因によっている。…中略…森林火災の多発により、どの地方においても砂漠化が発生しており、植物が根ごと失われ、砂の移動が進んでいる。

フブスグル県のオラーン・タイガ周辺の管理を要請

フブスグル県オラーンオール群のオラーン・タイガ周辺は、自然が豊かな特別保護区となっているが、現地の住民は違法に金採掘を行っている。

「ニンジャ」と呼ばれる手作業の金採掘業者が美しい自然を破壊しているため、同県選出の国会議員が対策を講じることになった。

春季国会で決議された「河川の源流域・貯水池の保護区・森林区における鉱床探査・採掘禁止法」にある「特別保護区の境界線を政府が改めて定める」との規定に従い、…中略…同区域の境界線を迅速に定め、違法金採掘業者の活動を制限するよう要請した。…中略…オラーンオール群オラーン・タイガ、フグ川の源流で昨年10月頃から違法なニンジャらが金を採掘し始めており、現在その数が2000人にも達していることがわかった。

現場は水資源の豊かなタイガや峡谷など自然景観がユニークな地域であるが、違法採掘業者が安全義務を守らないため負傷するケースも多く、これまでに3人が死亡する悲惨な事件もおきている。

その違法行為だけでなく飲酒、売春、強盗などの事件が相次ぎ、周辺の自然が短期間では回復できないほど破壊が進んでおり、この問題を迅速に解決する必要があると議員らが判断した。

政府、2009年度上半期活動報告書を発表

…略…カシミヤの輸出を22箇所の税関で行うことにしたことで輸出を促進し、遊牧民の所得を増やす重要な対策となった。これらの成果として、マクロ経済が安定する傾向が出てきた…以下略。

以下は、2009年09月25日付けの『モンゴル通信』(No.36 第220号)に記載されていた記事だ。

選挙公約が遊牧民の責任感を弱める

モンゴル国には現在4330万頭の家畜がいる。ところが来年には6000万頭に達するという試算がある。

家畜頭数が1993年以降増え続けてきた一方で、家畜の健康状態が悪化している。そのため「牧畜国家」と言いながら食肉の輸出が十分にできず、家畜頭数が草原の牧養力を超えてしまったため、放牧にかかる費用が年々増加している。…中略…エルヘムバヤル顧問は、「近年、小型家畜がより増える傾向にあります。過去の例では輸出は牛肉・馬肉が多いのです」…以下略。



特定非営利活動法人 GNC Japan
<http://www.kyouzon-gnc.com>

GNCらしく、環境問題の観点から見てみると…

何というわけではないかもしれませんが、私は「…ん??」と感じてしまうんです。

この記事は、私が独断と偏見で選んだものです。また、ほんの一部でしかありません。
でも、もし何か「…ん??」と感じるところがあれば、教えて欲しいです。

A

10月19日付けの読売新聞に、こんな記事があったそうだ。

オリオン座流星群今夜から出現ピーク 今年が観測ラストチャンス

2006年以降、出現数が急増しているオリオン座流星群が、19日夜から23日未明にピークを迎える。

星を初めてちゃんと見たのは、6年前北海道にいたとき。
広い空に、都会では見えない天の川が流れていた。
冬空の下、猫をお腹の上に乘せ、地面に寝っころがって空を見た。

2度目にちゃんと見たのは、去年モンゴルに行ったとき。
1週間のゴビ砂漠への旅行。
南へ行けばいくほど、空は晴れ、雲ひとつない。
懐中電灯をもって近くの山に登り、丁度いい岩を見つけて寝っころがる。

日本で見たことのないような、星が見える。
一筋、また一筋、流れ星が流れる。
星が、落ちてくる。

私たちが見る星は、何億年・何十億年と旅した光。
今見える光は残像。
この流れ星は、いつ流れたのだろうか？
今見える星は、もしかしたら、ないのかもしれない。
星に住む人まで見えるような望遠鏡があったら、私たちにはいつの彼らが見えるのだろうか？
同じように、何億年も昔の私たちを見ている誰かがいるのかもしれない。
外から見る地球は、青く、きれいなんだろうか…。

天の川はモンゴル語で、テンゲリン・ザータス。
「天(てん)のつなぎ目」。
天の川が、二つの空をしっかりとつないでいる。
日本では触れることのできない、空が広がっている。

そこら辺にある地上の星より、本当はあるはずの天の星が見たい。
今すぐモンゴルに行って、降り注ぐ星に迎えられたい。

A



特定非営利活動法人 GNC Japan
<http://www.kyouzon-gnc.com>

はじめまして。モンゴルに2009年1月より2年間の期間で青年海外協力隊として活動をしている牛嶋といいます。私の活動上の職種は村落開発普及員というもので、簡単にいえば現地の人々と一緒に環境で生活をしながら村起こしのお手伝いをさせていただく、というものです。私は今年の2月からボルガン県ブレグハンガイ村という地方の村で生活しています。モンゴルの地方、しかも村レベルで生活している外国人は安全上、生活の不便さなどの理由からあまりいないのが現状です。ここでは、地方の現状を少しでも伝えていければと思います。

まず、モンゴルは日本と似たように行政区分で21の県(アイマグ)があり、その中に村(ソム、日本でいえば市にあたる)があり、またその中に区域(バグ)が分かれて細やかな行政区分がなされています。ボルガン県は首都ウランバートルがある中央県の隣の県で、私の村ブレグハンガイ村に行くためには公共バス(週3便)で朝8時に出発し、アスファルト道路もない草原の道を約7~8時間かけて行くことができます。

村の人口は約2300人。村の中心部には病院(人、家畜)、役場、文化センター、9年生学校、幼稚園があります。子どもの数は幼稚園、9年生学校合わせて300人位です。公共浴場はありますが、村には井戸が2つしかなく水源が乏しいため定期的に営業はしておらず村の人は家でお湯を沸かして体や髪を洗うことが多いです。もちろん、蛇口をひねれば水がでるという状況ではなく、週に2~3回ほど水汲みをして必要な水を各自が用意します。村に住んで痛切に感じるのはこの水の問題です。

村に井戸は2つありますが、1つは昨年末に国際機関の援助でできたもの、もうひとつは5年くらい前に国際NGOの援助でできたもので、料金は1リットル当たり約1トゥグルクで購入します。水を汲むというのは自分で体験してわかったのですが、大変な重労働です。水汲みは主に働き手でない人の仕事(子ども、おじいちゃん、おばあちゃんが水汲み用の荷台を押して水を運びます)でもありますが、私の村の場合、井戸が住居よりも遠い人々が多いため馬が水の入ったタンクを馬車のように引っ張り週3回村を巡回する有料サービスもあります。しかし、これも時間がゆったり流れている村時間の影響なのか、井戸も毎日同じ時間にあいているわけでもなく、馬車も決まった時間にきてくれるわけでもなく、時には水が欲しいと思って朝から晩まで馬車が来てくれるのを待つ時もあります。そんな時も日本人である私は「まだ来ないの? 本当に来るの?」と水がない不安に襲われて何度もモンゴル人に聞いてしまうのですが、村の人はみな「大丈夫。いつか来る」ととても楽観的です。確かに、今まで時間通りに来てくれたことは一度もありませんが遅れても必ず約束は覚えていてくれます。

水がない生活になれている村の人は水がなくてもそこまで焦らず、また水を必要量以上に家に保管することもしていません。村の人は科学的な専門的な教育を受けたわけではありませんが、水を何日も保管すると悪くなること、水の状態をみて水が悪化していること、水を貯蔵するための水タンクが衛生的かどうかニオイや視覚で判断し、水と適切につきあっている姿が度々みられます。生活をする上での知恵が備わっている人々の姿を見るたびに厳しい自然の中で培われてきた人々の知識に感動させられます。

ただやはり水が乏しいということはたくさん抱えています。手洗いやうがい、歯磨きという衛生的な習慣を定期的にするのモチベーションが下がったり、洗濯物や食器を十分に濯がないこと、また植林された木など

に水を与えるために大がかりな人と車が必要となってしまうこと、野菜や小麦栽培、小規模ビジネスを興す際にも水を確保することがひとつの大きな問題として浮かんでしまうことが現状です。雇用を伴うビジネスや大規模農場を始めようとする人々もいますが、口々に水の問題と井戸を掘削するためのコストをもつ資金がないことに不満が集中します。村における伝統的な自給自足に近い遊牧を基幹とした生活では医療、教育また十分な娯楽を享受することができず必然的に現金収入が必要となってきます。しかし、今までのように自分で水を使用するだけ確保するとい小規模なやり方では「発展したい」と思う村の人々の現状に対応できていないのも現状です。(村の人々が抱く「発展したい」思いは次回書きたいと思います。)村の人々に押し迫る「発展」「近代化」と伝統的な生活のバランスを上手にとっていくことを痛切に感じます。

(写真:村に1頭ある井戸が遠い家庭のために水を運んでくれる馬車)



牛嶋

村の子ども達について

ブレグハンガイ村には教育機関として幼稚園と9年生学校が1つずつあります。幼稚園は年少クラスと年長クラスの2クラスがあり朝の9時から17時まで子どもが通園しています。クラスはそれぞれ30人程です。先生は1クラスにつき2名働いています。9年生学校は1クラス30人ほど、計250人程の子どもが通学しています。9年生学校が日本の小学校と中学校にあたりますが、教室や先生の数が足りないことやモンゴルの制度として授業は2部制(主に午前開始のクラスと午後開始のクラス)に分けられています。

モンゴルは政府の方針で義務教育の就学年数が12年と変更されました。しかし人口も子どもの数も少ない村では9年生学校を12年に増設することができません、そのため9年生を卒業した子どもたちは故郷である村を離れそれぞれが近隣都市の学校に進学することになります。学校が併設する寮に入る子や親族の家にホームステイする子、また子どもが進学することに合わせて親も村から都市へ引っ越しするケースもみられます。いずれにしても、9年生というまだ15歳前後の子どもたちが生れ故郷や親元を離れ、自立した生活を始めるという現実には驚かされますし、子どもたちのたくましさを非常に感じさせられます。

牛嶋

今は携帯電話が村でも通じるようになったため、コミュニケーションの部分では問題はなさそうです。しかし、ガソリン代の値上げや交通機関が充実していないこと、公共交通機関の運賃が村の人の収入から考えると高額なことなど、子どもや親がそうそう頻繁に会うわけにもいきません。

親族間の助けあい、家族への思いが非常に強い村の人々ですが、厳しい自然や人口が少ないという理由だけでなく、進学や就職で離ればなれに住まざるを得ないということもそのひとつの理由であることを感じています。

また学校が2部制で学校にいる時間以外は子どもたちは何をしているのか、というと家で授業の復習や家の手伝い、体育館が空いているときは体育館でバレーやバスケットボールをして遊んだり、友人の家に遊びに行くことが多いです。日本のようにテレビゲームがあるわけでもなく、おもちゃやボール1つにしてもとても高額なもので全ての家庭にあるわけではありません。図書館もありますが本の数も少なく、設備も充実していないため、本を読むという習慣がみについているわけではありません。日本と比べると物や環境が乏しい現状ですが、子どもたちは教科書の詩を驚くほど正確に暗唱したり、遊牧民である家族を手伝っているため家畜の世話、馬ののりこなし、伝統的な料理を作ることなど、驚くほど素晴らしい力をもっています。

久々の投稿、そして、いつの間にか 2009 年も年末になってしまいました。

皆さん、よい年末年始をお過ごしください。

ところで、モンゴル国は旧正月をお祝いする。

2010 年は、2 月 13 日が大晦日、2 月 14 日～の 1 週間がモンゴルのお正月にあたる。

そのお話はまた、その頃に。

今回は、11 月 24 日のモンゴル通信の次の記事に注目し、以下にまとめた。

『ビニール・プラスチックの再利用で環境を守る

サン・オリギオ社社長に聞く』

モンゴル国北部のダルハン市での市場調査によると、1 世帯から 1 ヶ月最低 5 キロのプラスチックゴミが出るそう
だ。首都ウランバートルには 23～24 万世帯あり、月に 1000 トン以上のゴミが排出されることになる。これらのゴミ
は分解されずそのまま環境を汚染している、と社長は述べる。

サン・オリギオ社では、この廃棄されたプラスチックやビニールを再利用し、マンホールのふたや椅子、柵、板な
どの代替製品を作っている。これらの製品は環境にやさしいと評判のようだ。

ダルハン市とウランバートル市の集荷センターを設け、無職やホームレスなどの人々からゴミを購入し、原料とし
ている。他に、ウランバートル市のゴミ処理場や工場からも原料を購入している。しかし現実には、生産量が少な
いため、年間 250～300 トンの廃棄物を再生しているに過ぎない。

現在、モンゴル国では多くの人々が廃棄物を集めて生計を立てている。社長によると、この事業は雇用の創出にも
役立っており、従業員は 27 名、原料収集の段階では、200 人の雇用が創出されたとしている。

またこの事業は、森林資源を多量に節約できる可能性もあると述べる。1 トンのプラスチックで生産した板の代替
製品は 1.5 立方メートル以上の板に匹敵するそうだ。これを計算すると、1650 立方メートルの木材を節約できたこと
になるという。そのため、森林保護にも役立つのではないかと話している。

過去 5 年間に、3 億 3000 万トゥグルグで廃棄物を購入し、7 億トゥグルグの製品を作り出した。1 億 2000 万トゥグ
ルクを給与、4 億 7000 万トゥグルグの投資を行っている。

最後に社長は、事業の将来について次のように述べている。

廃棄物の運搬に多額の費用がかかっており、今後は新技術や機械を導入する必要も出てくる。そのため、最低
でも 2 億トゥグルグの投資が必要となっている。政府がこの分野の事業に注目し、支援してくれれば多様な意義を
持つだろう。それができれば、製品の品質が大きく変わり、需要も増えるでしょう。

(国営モンツァメ通信社 2009/11/24/ No.44,45:10)

急速な市場経済化を経験している発展途上国にとって、急激に増加するゴミの問題と格差による貧困問題は解決すべき問題であり、しかもそれぞれでは解決できない大きな問題である。それはモンゴル国も例外ではない。このリサイクル事業は、新たな雇用創出とゴミ問題を一挙に解決する策となり得るかもしれない。

だが、まだ解決すべき課題は多く見える。

この事業による雇用の確保について見ると、数字の上では以下のようなになる。廃棄物購入 3 億 3000 万トゥグルクと給与 1 億 2000 万トゥグルク足して、創出雇用 200 人と 5 年の継続年数で割ると、

$$3 \text{ 億 } 3000 \text{ 万トゥグルク} \div 200 \text{ 人} \div 5 \text{ 年} = 33 \text{ 万トゥグルク} / \text{年}$$

となる。つまり、1 年間の 1 人あたりの収入は 33 万トゥグルクということだ。

2009 年 8 月に私がインタビュー調査をしたところ、モンゴル国ダルハン市の給与所得者の平均所得は、20~30 万トゥグルク/月であった。上記の収入額は、給与所得者の 1 ヶ月~1.5 ヶ月分ではない。

ウランバートル市内の大衆食堂で、モンゴルで一般的に食べられているボーズ(ゆで餃子)、ホーショール(揚げ餃子)は、それぞれ 300 トゥグルク前後の値段であった。もちろん、家庭で作ればもっと安いだろうが、近年の原油の高騰により、物価も高騰している。

この数字は、大まかな値ではない。しかし、現時点での雇用の確保という点に関して言えば、創出されたといいたいがたい面がある。今後、ゴミのリサイクルによる雇用の創出を目指すならば、ゴミの収集→リサイクル→販売のシステムが確立される必要があるのではないだろうか。うまくいけば、それにより雇用機会が生まれ、1 人あたりの手取りも増える。ただし初めのうちは、政府や各種援助機関による協力体制が必要となるだろう。

それにしても、ウランバートル市にしろ、ダルハン市にしろ、街中でゴミ箱を見たことすらなかった。ビン・カン・ベツトボトルを集めて生計を立てている人は別にして、分別を考えてゴミを出す習慣はない。2009 年の夏に初めて訪れた 108 学校で、分別できるゴミ箱が設置されているのを見てひどく驚き、思わず写真を撮った覚えがある。

都心の道路にはゴミが山になり、散乱し、郊外に出ても草原にビニール袋が舞っている。

この事業をしっかりと運営することができるなら、社長の言うように、モンゴルの環境問題と貧困問題に多少なりとも貢献できるのではないだろうか。

108 学校に設置されているゴミ箱



(2009/09/10 撮影)

モンゴル国ウランバートル市内の一面



(2009/09/10 撮影)

A